

海外移住 資料館だより

Japanese Overseas
Migration Museum News

No. 52
2019 | November

日本人の海外移住は150年以上の歴史があります。JICA横浜 海外移住資料館では、海外へ移住し、それぞれの国や地域で新しい文明作りに参加してきた日本人移住者の歴史と、その子孫である日系人について広く理解を深めてもらうことを目的に、さまざまな資料を展示しています。

■発行元：JICA横浜 海外移住資料館
神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2階
Tel:045-663-3257(代) URL: <https://www.jica.go.jp/jomm>
■編集発行人：JICA横浜 海外移住資料館 館長 熊谷晃子

ボリビア日本人移住120周年

INMIGRACIÓN JAPONESA A BOLIVIA



ボリビアに生きる日系人

—守りゆく伝統、見据える未来—



1928年当時の首都ラバスの日本人会 (在ボリビア日本大使館提供)

企画展示

ボリビア日本人移住120周年記念展示

ボリビアに生きる —日系人の生活とその心—

2019年11月2日(土)～2020年2月2日(日)
JICA横浜 海外移住資料館(企画展示室)

公開講座

日本人ボリビア移住120周年を迎えて
11月17日(日)14:00～15:30

講師 安仁屋 滋氏
(ボリビア日系協会連合会事務局長)

会場 JICA横浜 会議室1

入場無料・予約不要

ボリビア

日本人移民の足跡



アンデスを越えてボリビアへ

1899年にペルーへ到着した第一回移民790人。そのほとんどはサトウキビ畑での出稼ぎ労働者でした。日本で聞いていたよりもはるかに厳しい労働環境のなか、アマゾンのゴム景気の噂を聞きつけた93人は、4,000メートル級のアンデス山脈を越え、アマゾン源流をカヌーで下るといふ過酷な旅の末ボリビアへ入国。これが日本人ボリビア移住のはじまりとされています。ペルーからボリビアへの転住はしばらく続き、その多くはゴム集積地のベニ県リベラルタ方面へ向かいました。初期の日本人移民はほぼ男性だったので、現地の女性と結婚してボリビア社会に同化していきました。



1910年代にラパスで成功した小森商会のシャツ工場(1937年設立)

都市部への進出、戦争の影響

日本人移民の一部は、首都ラパスをはじめとした都市で働きはじめました。床屋や商店などで活躍した日本人移民は、やがて日本人会を結成します。成功者の中には、日本から花嫁を迎える者もあり、子どもには日本語教育を与えました。ボリビアとパラグアイとのチャコ戦争(1932-35年)ではボリビア政府へ献金を行うなど、現地社会へ貢献していた日本人移民ですが、1941年に太平洋戦争がはじまると、ボリビアの敵性国民としてアメリカへ強制連行されたりしました。

戦後の二大移住地 オキナワ・サンフアン

終戦後、アメリカ軍の統治下にあった沖縄では土地を失い路頭に迷う人が増え、それを知ったボリビア国内の沖縄出身者が働きかけて、ボリビア・アメリカ・琉球政府協力のもと、故郷沖縄の人々を受け入れた先がオキナワ移住地でした。また、日本の製糖業者西川利道率いる西川移民が基礎を築き、日本・ボリビア間協定による計画移住が行われた先がサンフアン移住地であり、この二つが戦後の二大日本人移住地となりました。入植当時(1950年代中頃)、道路も電気もない南米のジャングルを開拓することは苦悩の連続で、多くの離脱者も出ましたが、苦境のなか移住者は協同組合を作り、協力して農業に励みました。1970年代に入ると経済発展を遂げた日本からの支援が本格化し、農業の機械化が進んだ結果、両移住地はボリビア有数の農業地帯となりました。



サンフアン移住地への道路開通工事



沖縄からの移住者を乗せ出航する船(第17次移住団1963年3月)



ラパスの日本庭園で開催される「お祭り」

今なお続く、日本との絆

1980年代には戦後移住地の一世二世、1990年代には戦前移民の子孫を中心に日本への出稼ぎブームが起こり、日系社会の空洞化、日本との新たな交流という正負双方の影響が現れました。移住100年、110年、120年の節目の年には、皇室ご臨席で記念祭が行われています。ボリビアの日系人は、日本とのつながりを大切にしつつ、今を生きています。



オキナワ移住地

移住地に生

- 守りゆく伝統、

1954年から1986年までに沖縄出身の584家族・3,385人が移住。現在は移住地全人口の約7%にあたる約900人の日系人が暮らす。1998年に周辺の村落とあわせて行政区となり「オキナワ村」がボリビア政府から承認された。総面積111,378ha（沖縄本島よりやや小さい）のうち、約42%が日系人所有の農地。
*日系人数と面積は2019年9月現在、移住地人口は最新の2012年国勢調査による



家庭では白米と肉料理が中心。豊年祭や敬老会では沖縄そばやヤギ汁など沖縄料理を作る。日本食堂には太巻き寿司、てんぷら、ラーメンなどのメニューが並び



オキナワ診療所の医師は全員オキナワ移住地出身の日系人。24時間診療、救急にも対応している



70歳以上の日系人は105人。診療所内では平日2時間のリハビリ体操が、文化会館では月2回の予防型デイサービスが開催されている。元気な人が多く、最近できた介護用ショートステイ施設の利用者はほとんどいない
(写真提供:オキナワ日本ボリビア協会)



学校の運動会や豊年祭にはエイサー、琉球国祭り太鼓、空手演舞等が、成人式の余興には沖縄角力(相撲)大会が行われる。学校で子どもたちは先生や地域の大人から三線やエイサーを習う
(写真提供:オキナワ日本ボリビア協会)



成人式では女性は振袖を着る。子どもの日には鯉のぼりが飾られ、敬老の日には子どもたちが日本の歌を歌う。地域の人が亡くなると婦人会が集まり炊き出しも行われる。区ごとに回覧板や「お知らせ」があり、年1回ゴミ拾いキャンペーンも行われている



入植50周年に完成した「オキナワボリビア歴史資料館」。入植時からの歴史を示す生活道具や写真など約2,000点を展示、保管している。ボリビアの高校生や大学生も勉強に訪れる



1965年設立のコロニア沖縄農牧総合協同組合(CAICO)は畑作(大豆、小麦等)、畜産、営農を支援。特に国際的な商品である大豆に力を入れ、加工工場を建設し、大豆加工品の80%を輸出している



移住者の視点

受け継がれる伝統文化

安里 昇さん(左)・将貴さん(右)
1962年に家族と共にオキナワ移住地に入植。小さい頃から畑仕事を手伝い、農業一筋で子ども3人を育てる。長男の将貴さんは大学で経営学を学び、現在は家業を手伝っている。



入植時の移住地は雑草が大きく、家の周りは虫だらけで、まだ5歳だった私は毎日蚊に刺されて泣いていました。通学路の未整備など不便が多く、十分な義務教育を受けられませんでした。自分の子どもたちには十分な教育を与え、普段から沖縄の習慣、言葉などを伝えていきます。若い人々には感謝の気持ちを忘れずに持っていてほしいです。(昇さん)

時間を守る、何事にも責任を持つなど日本人としての生き方や習慣を大切にしています。祖母が元気な頃はよく沖縄の話を聞きました。好きなウチナーグチ(琉球語)は「いちやりばちようで〜(一度会えばみな兄弟)」。尊敬する父の跡を継ぎ、農業の産業化に取り組みたいです。青年会では地域行事のサポートや後輩への指導などを行なっています。入植から65年、多くの苦勞の末に今があるので、感謝の気持ちを忘れず伝統を引き継いでいきたいです。(将貴さん)

移住者の視点

移住地の課題

中村 侑史さん
1963年にオキナワ移住地に入植。農業の傍ら2000~2006年、2010~現在までオキナワ日本ボリビア協会会長を務める。



主力の農業は今やそれぞれが営農を確立し、一定の収入を確保できるようになりました。移住当初は中学校を出すのがやっとだった子どもの教育も、今はほとんどの家庭が大学まで出しています。

世代交代が進み二世、三世の時代ですが、大学を出て勤め人になるより、ここで農業を継ぐ方が収入がよいので、子どもたちは概ね移住地に残ります。畑の平均面積は300ha(東京ドーム約64個分)と広く、現地の人たちよりも豊かな暮らしができるのです。その反面、せっかく大学で勉強してもまたオキナワ移住地に戻ってくると、ボリビア社会で活躍する日系人がいなくなるのではないかと、これがボリビア日系社会の大きな課題です。

オキナワ移住地の日系人は、移住地人口の1割にも満たないことからボリビア人との協調は大切です。平和で明るい移住地を維持するためにはこれが絶対必要なのです。

きる日系人 見据える未来



サンファン移住地

1955年から1992年までに長崎、福岡、北海道などから302家族・1,684人が移住。現在は移住地全人口の約8%にあたる約720人の日系人が暮らす。1965年にサンファン村として、2001年には同市としてボリビア政府から認められた。総面積は27,132ha(千葉市とほぼ同じ)。
*日系人数と面積は2019年9月現在、移住地人口は最新の2012年国勢調査による



「伊藤食堂」「小田食堂」では長崎ちゃんぽんが、「味彩」ではザンギという北海道の郷土料理などが食べられる



サンファン学園で行われる盆踊りには近隣のボリビア人も多数訪れる。婦人会が浴衣の着付けをしてくれる。焼きそばやお汁粉なども提供され、日本の食と文化の紹介に一役買っている
(写真提供:在ボリビア日本大使館)



70歳以上の日系人は114人。2012年に高齢者の活動拠点「開拓者憩いの郷」が開館。生きがい教室やデイサービス、ゲートボールなどのレクリエーションを通じて健康づくりや集いの場を提供している。2013年には診療所の隣に日系高齢者ケアセンターが開設。ショートステイとデイケアサービスなど医療の視点で家族を支援している

(写真提供:在ボリビア日本大使館)



サンファン農牧総合協同組合(CAISY)は1957年に設立され、コメ、大豆、養鶏、マカダミアナッツ、畜産物などの生産、加工販売、新種の開発などに取り組んでいる



サンファン診療所には内科、産婦人科、小児科などがある。2013年にはリハビリ専門施設もつくられた。移住地出身の日系人医師もいる



サンファン日本ボリビア協会が運営する「サンファン学園」。約20年前は全体の70~80%が日系児童・生徒で、日本語の授業は必修だったが、現在は25%と減少し、日本語の授業は選択制。公教育はスペイン語で行われている
(写真提供:在ボリビア日本大使館)

支援者の視点

日本語教育の現在

渡邊 萌捺さん(JICA日系社会青年ボランティア)
2019年3月から日本語教育隊員(短期)としてサンファン学園で活動中。担任は持たず日本語クラスを巡回。日系イベントにも積極的に参加している。

サンファン移住地では日本語や日本文化が大切に守られ、サンファン学園に通う日系児童たちも日本の教科書を使用して日本と同じ「国語」を学んでいます。同学園に通うボリビア人の児童たちも3年生から日本語の授業を選択することができます。

しかし、なぜ日本語を学ぶのかについて考えることは少なく、将来についても親の仕事以外のイメージを持っていない子どもが多いと思います。職業選択の幅を広げ、サンファンのさらなる発展につながる日本語の使い道の提案が必要だと考えています。

ある三世の人が、「日本の道徳観を持っているから現地の人に信頼され、お客さんを増やせている」と話しているのを聞いて、改めて日本語を残していく必要性を感じ、子どもたちにも「日本語、日本文化を学んで良かった」と感じられる体験をしてほしいと思っています。



支援者の視点

移住に学ぶ多文化共生

松本 仁さん(元JICA日系社会青年ボランティア)
1997~2000年、日系社会青年ボランティアの日本語教師隊員としてサンファン学園で活動。帰国後JICAに就職。中南米部計画・移住課長だった2015年にはサンファン移住地入植60周年記念式典にも参列。2018年よりJICAメキシコ事務所長。

サンファン移住地は家族や地域のつながりが強く、移住地全体が一つにまとまった大変居心地よい所でした。

故郷での厳しい生活から移住を決断した人たちのチャレンジ精神や、現地社会との共存と安定した生活を得るために伴った苦勞、その結果として移住先の地域や国の経済社会開発に貢献した功績といったものは、現代日本の私たちには一見身近でないように思えるかもしれませんが、ですが、見方を変えると、かつて移住した日本人の姿は、いまの日本で働く日系人や外国人の姿と大きく違わないのではないのでしょうか。

いま日本に暮らす日系人や外国人が地域社会と共存して安定した生活を送ることは、彼らの生活向上だけでなく、地域や日本の経済社会の開発につながります。だからこそ私たちは、身近に暮らす日系人や外国人と共存共栄する社会を目指すべきだと思います。



企画展示

「コーヒーが結んだ日系人と日本」を開催

日本におけるコーヒーの普及は、海外に渡った日本人移民と密接な関係がありました。そんな知られざる歴史の一端を展示した企画展示「コーヒーが結んだ日系人と日本」を、2019年6月29日～10月6日まで海外移住資料館企画展示室で開催しました。

展示を見た人からは「コーヒーと移民、特にその生活についてよくわかった」「教科書では知ることができない歴史を知り、視野が広がった」「コーヒーの自動収穫機などコーヒーの普及に日本人が寄与していることを知って感慨深い」などの感想が上がりました。



カフェパウリスタ社長による公開講座

9月1日、カフェパウリスタ代表取締役社長の長谷川勝彦氏を講師にお迎えし、公開講座を開催しました。カフェパウリスタは1911年にブラジル移民の父と呼ばれる水野龍が銀座に開業し、その店の焙煎担当だった長谷川氏の祖父・長谷川主計氏が跡を継いで、勝彦氏はその3代目に当たります。

勝彦氏は水野龍がカフェパウリスタを開業させるまでの日本人移民にまつわる歴史的な話や、近年におけるグローバルマーケットでの厳しい競争、ブラジル産コーヒーの価値を向上させことを目標に、生産者と直接接合いながら納得したコーヒー豆を買い付けていることなどを話されました。

講演後には、同社イチオシの「森のコーヒー」がふるまわれ、70人を超える参加者たちは、そのほのかな甘みと豊かな香りを楽しみました。

*パウリスタ=ポルトガル語でサンパウロっ子の意



ブラジルコーヒーの価値向上を目指す
カフェパウリスタの長谷川勝彦社長

映画「ガイジンー自由への道」



10月5日に映画「ガイジンー自由への道」を上映しました。日系ブラジル人三世の映画監督チズカ・ヤマザキ氏による1980年の長編デビュー作で、日本からブラジルに渡った初期移民のコーヒー農園での生活を描いた作品です。同年のカンヌ映画祭で国際批評家連盟賞を受賞していますが、日本の映画館では上映されたことがなく、待望の名作とあって当日は60人を超える映画ファンが楽しみました。

募集

2019年度 JICA海外移住 懸賞論文

- テーマ** 中南米地域の邦字新聞を活用した日本人移住に関する諸研究
応募資格 年齢・職業・国籍不問
応募方法 ①メールもしくは郵送にて送付
 ②8,000～20,000字程度(日本語のみ/800字以内の要約添付)
 ③未発表論文もしくは2018年4月以降に発表された論文
締め切り 2020年2月28日(金)(郵送は当日必着)
問い合わせ JICA横浜 海外移住資料館 懸賞論文事務局(海外日系人協会)
 Tel: 045-211-1783 E-mail: article@jadesas.or.jp
賞・賞品 正賞(1名) 賞状および賞金20万円
 副賞(5名) 賞状および賞金5万円

詳しくは
JICA横浜
ホームページで
ご確認ください

日本人移住120周年記念式典 眞子内親王殿下がペルーとボリビアを公式訪問

秋篠宮眞子内親王殿下が2019年7月9日から22日までの日程でペルーとボリビアを公式訪問し、両国で開催された日本人移住120周年記念式典にご臨席されました。

ペルーの首都リマで開催された同式典には日系人約500人が参列。眞子内親王殿下は、ペルーと日本の懸け橋である約10万人の日系人に敬意を表され、その文化的、社会的活動の継続を賛美されました。また式典に先立ち、ペルーの日系最高齢者を含む100歳以上の4名とお会いになり、続いての訪問国ボリビアでも、サンフアン移住地とオキナワ移住地で日本人移住者らと交流されました。

眞子内親王殿下は両国ご訪問前の4月22日、当館で開催中のペルー日本人移民120周年記念の企画展示を熱心にご視察され、ご訪問に備えられました。

ニッケイ新聞(ブラジル・サンパウロ/7月19日付)



ブラジルの国民的漫画家ソウザ氏らが来館

2019年4月16日、ブラジルの国民的漫画家マウリシオ・デ・ソウザ氏が当館を訪問しました。ソウザ氏は新聞記者を経て、1970年より漫画『モニカ&フレンズ』の連載を開始。同シリーズは現在に至るまで、ブラジルで広く人気を博しています。ソウザ氏夫妻とマウリシオ・デ・ソウザプロダクション一行は、館内を見学した後、当館の熊谷晃子館長らと対談し、JICAの取り組みについて説明を受けました。



漫画『モニカ&フレンズ ブラジルと日本』



ソウザ氏(前列中央) 一行と熊谷晃子館長ら

ブラジルと日本の交流や友好をテーマに描かれた『モニカ&フレンズ ブラジルと日本』。その日本語版とポルトガル語版それぞれ1,000部ずつが当館へ寄贈されました。



今後の予定

- 11月17日(日) 公開講座「日本人ボリビア移住120周年を迎えて」
- 12月 3日(火) クリスマスイベント(～12月25日)
- 2020年
- 1月25日(土) 日向ノエミア氏講演会
- 3月 7日(土) 新企画展示スタート

- 開館時間 10:00～18:00(入館は17:30まで)
- 休館日 月曜日(月曜日が祝祭日の場合は翌日)と年末年始(12月29日～1月3日)
- 入館料 無料

- みなとみらい線
「馬車道」駅(4番出口)から徒歩約8分
「みなとみらい」駅(クイーンズスクエア方面改札)から徒歩約15分
- JR線・市営地下鉄
「桜木町」駅から(汽車道→ワールドポーターズ→サークルウォーク)徒歩約15分



独立行政法人国際協力機構 横浜センター
海外移住資料館

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2丁目3番1号 TEL.045-663-3257 FAX.045-222-7162

<https://www.jica.go.jp/jomm>

Eメール info@jomm.jp

